

<リカバリーケア・プログラム>

科目	呼吸器（人工呼吸療法に係るもの）関連		
特定行為	(A) 侵襲的陽圧換気の設定の変更		
	(B) 非侵襲的陽圧換気の設定の変更		
	(C) 人工呼吸管理がなされている者に対する鎮静薬の投与量の調整		
	(D) 人工呼吸器からの離脱		
時間数	30	講義21 演習8 試験1 実習	
概要	<p>人工呼吸療法の必要性や特徴を理解し、安全に管理するために基礎知識を学ぶ。</p> <p>医師の指示の下、手順書により身体所見（人工呼吸器との同調、一回換気量、意識レベル等）及び検査結果（動脈血液ガス分析、経皮的動脈血酸素飽和度（SpO2）等）が医師から指示された病状の範囲にあることを確認し酸素濃度や換気様式、呼吸回数、一回換気量等の人工呼吸器の設定条件を変更するための知識と判断過程を学ぶ。</p> <p>医師の指示の下、手順書により、身体所見（呼吸状態、気道の分泌物の量、努力呼吸の有無、意識レベル等）及び検査結果（動脈血液ガス分析、経皮的動脈血酸素飽和度（SpO2）等）等が医師から指示された病状の範囲にあることを確認し、非侵襲的陽圧換気療法（NPPV）の設定条件を変更するための知識と判断過程を学ぶ。</p> <p>医師の指示の下、手順書により、身体所見（睡眠や覚醒のリズム、呼吸状態、人工呼吸器との同調等）及び検査結果（動脈血液ガス分析、経皮的動脈血酸素飽和度（SpO2）等）等が医師から指示された病状の範囲にあることを確認し、鎮静薬の投与量の調整を行うための知識と判断過程を学ぶ。</p> <p>医師の指示の下、手順書により、身体所見（呼吸状態、一回換気量、努力呼吸の有無、意識レベル等）、検査結果（動脈血液ガス分析、経皮的動脈血酸素飽和度（SpO2）等）及び血行動態が医師から指示された病状の範囲にあることを確認し、人工呼吸器からの離脱（ウィーニング）を行うための知識と判断過程を学ぶ。</p>		
目標	1. 呼吸器（人工呼吸療法に係るもの）関連に含まれる特定行為を安全かつ確実に実践するための基礎的知識・技術を身につける		
	2. 医師の指示の下、手順書により、身体所見及び検査結果等が医師から指示された病状の範囲にあることを確認し、「侵襲的陽圧換気の設定の変更」の実施の判断、実施、報告の一連の流れを適切に行えるようになる		
	3. 医師の指示の下、手順書により、身体所見及び検査結果等が医師から指示された病状の範囲にあることを確認し、「非侵襲的陽圧換気の設定の変更」の実施の判断、実施、報告の一連の流れを適切に行えるようになる		
	4. 医師の指示の下、手順書により、身体所見及び検査結果等が医師から指示された病状の範囲にあることを確認し、「人工呼吸管理がなされている者に対する鎮静薬の投与量の調整」の実施の判断、実施、報告の一連の流れを適切に行えるようになる		
	5. 医師の指示の下、手順書により、身体所見及び検査結果等が医師から指示された病状の範囲にあることを確認し、「人工呼吸器からの離脱」の実施の判断、実施、報告の一連の流れを適切に行えるようになる		
	6. 手順書の案を作成し、自身の臨床経験や環境、患者に応じて再評価・最適化できる能力を養う		
講師	大島 拓（救急科）		
	今枝太郎（救急科）		
学ぶべき事項	内容	方法	
1	呼吸器（人工呼吸療法に係るもの）関連の基礎知識	人工呼吸療法の目的、適応、禁忌	講義
2		人工呼吸療法に関する局所解剖と生理、人工呼吸療法を要する主要疾患の検査とフィジカルアセスメント	講義
3		人工呼吸療法を要する主要疾患の病態生理	講義
4		人工呼吸器管理の適応と禁忌	講義
5		人工呼吸器のメカニズム 種類、構造と管理	講義
6		侵襲的陽圧換気の設定の目的、選択と適応	講義
7	(A)侵襲的陽圧換気の設定の変更	侵襲的陽圧換気の換気様式の目的と適応と禁忌	講義
8		侵襲的陽圧換気の設定条件の変更に伴うリスク（有害事象とその対策等）	講義
9		侵襲的陽圧換気の設定の変更方法	講義
10		侵襲的陽圧換気の設定の変更（1）	演習
11		侵襲的陽圧換気の設定の変更（2）	演習

<リカバリーケア・プログラム>

12	(B) 非侵襲的陽圧換気の設定の変更	非侵襲的陽圧換気の目的、設定条件の選択	講義
13		非侵襲的陽圧換気の適応と禁忌	講義
14		非侵襲的陽圧換気の設定条件の変更に伴うリスク（有害事象とその対策等）	講義
15		非侵襲的陽圧換気の設定条件の変更方法	講義
16		非侵襲的陽圧換気の設定の変更（1）	演習
17		非侵襲的陽圧換気の設定の変更（2）	演習
18	(C) 人工呼吸管理がなされている者に対する鎮静薬の投与量の調整	人工呼吸管理がなされている者に対する鎮静の目的	講義
19		人工呼吸管理がなされている者に対する鎮静の適応、禁忌	講義
20		人工呼吸管理がなされている者に対する鎮静に伴うリスク（有害事象とその対策等）	講義
21		人工呼吸管理がなされている者に対する鎮静薬の選択と投与量、鎮静の方法	講義
22		人工呼吸管理がなされている者に対する鎮静薬の投与量の調整（1）	演習
23		人工呼吸管理がなされている者に対する鎮静薬の投与量の調整（2）	演習
24	(D) 人工呼吸器からの離脱	人工呼吸器からの離脱の目的	講義
25		人工呼吸器からの離脱の適応と禁忌	講義
26		人工呼吸器からの離脱に伴うリスク（有害事象とその対策等）	講義
27		人工呼吸器からの離脱の方法	講義
28		人工呼吸器からの離脱（1）	演習
29		人工呼吸器からの離脱（2）	演習
30	科目修了試験		試験
31	実習	侵襲的陽圧換気の設定の変更、非侵襲的陽圧換気の設定の変更、人工呼吸管理がなされている者に対する鎮静薬の投与量の調整、人工呼吸器からの離脱 各5症例	
評価	講義	全講義受講・確認テスト100%	
	演習	レポート 80%以上	
	試験	筆記試験 得点率90%以上	
	実習	各症例60%以上：評価表とレポート	

<リカバリーケア・プログラム>

科目	胸腔ドレーン管理関連		
特定行為	(A) 低圧胸腔内持続吸引器の吸引圧の設定及びその変更		
	(B) 胸腔ドレーンの抜去		
時間数	14	講義12 演習2 試験1 実習	
概要	胸腔ドレーンの必要性、目的、方法を理解し、かつ安全に管理を実践するための基本的な知識を学ぶ。 医師の指示の下、手順書により、身体所見（呼吸状態、エアリークの有無、排液の性状や量、挿入部の状態等）及び、検査結果（レントゲン所見等）が医師から指示された病状の範囲にあることを確認し、吸引圧の設定及びその変更とドレーンを抜去の判断・実施するための知識・技術を学ぶ。		
目標	1. 胸腔ドレーン管理関連の特定行為を安全かつ確実に実施するための基礎的知識・技術を身につける		
	2. 医師の指示の下、手順書により、身体所見及び検査結果等が医師から指示された病状の範囲にあることを確認し、「低圧胸腔内持続吸引器の吸引圧の設定及びその変更」の実施の判断、実施、報告の一連の流れを適切に行えるようになる		
	3. 医師の指示の下、手順書により、身体所見及び検査結果等が医師から指示された病状の範囲にあることを確認し、「胸腔ドレーンの抜去」の実施の判断、実施、報告の一連の流れを適切に行えるようになる		
	4. 手順書の案を作成し、自身の臨床経験や環境、患者に応じて再評価・最適化できる能力を養う		
講師	大島 拓（救急科）		
	今枝太郎（救急科）		
	田中数久（呼吸器外科）		
学ぶべき事項		内容	方法
1	(共通) 胸腔ドレーン管理関連の基礎知識	胸腔ドレナージに関する局所解剖と生理	講義
2		胸腔ドレナージを要する主要疾患とその病態生理	講義
3		胸腔ドレナージを要する主要疾患のフィジカルアセスメント	講義
4		胸腔ドレナージの目的、適応、禁忌	講義
5		胸腔ドレナージに伴うリスク（有害事象とその対策等）	講義
6	(A) 低圧胸腔内持続吸引器の吸引圧の設定及びその変更	低圧胸腔内持続吸引の適応と禁忌	講義
7		低圧胸腔内持続吸引に伴うリスク（有害事象とその対策等）	講義
8		低圧胸腔内持続吸引器のメカニズムと構造	講義
9		低圧胸腔内持続吸引器の吸引圧の設定及びその変更方法	演習
10	(B) 胸腔ドレーンの抜去	胸腔ドレーン抜去の適応・禁忌	講義
11		胸腔ドレーンの留置と抜去に伴うリスク	講義
12		胸腔ドレーンの抜去の方法と手技（1）	講義
13		胸腔ドレーンの抜去の方法と手技（2）	講義
14		胸腔ドレーンの抜去の方法と手技	演習
15	科目修了試験		試験
16	実習	低圧胸腔内持続吸引器の吸引圧の設定及びその変更、胸腔ドレーンの抜去 各5症例	
評価	講義	全講義受講・確認テスト100%	
	演習	レポート 80%以上	
	試験	筆記試験 得点率90%以上	
	実習	各症例60%以上：評価表とレポート	

<リカバリーケア・プログラム>

科目名	腹腔ドレーン管理関連		
特定行為	腹腔ドレーンの抜去（腹腔内に留置された穿刺針の抜針を含む。）		
時間数	10	講義8 演習1 試験1 実習	
概要	腹腔ドレーンの必要性、目的、方法を理解し、かつ安全に管理を実践するための基本的な知識を学ぶ。 医師の指示の下、手順書により、身体所見（排液の性状や量、腹痛の程度、挿入部の状態等）等が医師から指示された病状の範囲にあることを確認し、腹腔内に挿入・留置されているドレーン又は穿刺針を抜去するための知識・技術を学ぶ。		
目標	<ol style="list-style-type: none"> 1. 腹腔ドレーン管理関連の特定行為を安全かつ確実に実践するための基礎的知識・技術を身につける 2. 医師の指示の下、手順書により、身体所見及び検査結果等が医師から指示された病状の範囲にあることを確認し、「腹腔ドレーンの抜去」の実施の判断、実施、報告の一連の流れを適切に行えるようになる 3. 手順書の案を作成し、自身の臨床経験や環境、患者に応じて再評価・最適化できる能力を養う 		
講師	大島 拓（救急科） 大平 学（食道・胃腸外科）		
	学ぶべき事項	内容	方法
1	(共通) 腹腔ドレーン管理関連の基礎知識	腹腔ドレナージに関する局所解剖、主要疾患のフィジカルアセスメント	講義
2		腹腔ドレナージを要する主要疾患の病態生理（1）	講義
3		腹腔ドレナージを要する主要疾患の病態生理（2）	講義
4		腹腔ドレナージの目的、適応と禁忌、伴うリスク（有害事象とその対策等）	講義
5	腹腔ドレーンの抜去（腹腔内に留置された穿刺針の抜針を含む。）	腹腔ドレーンの抜去の適応と禁忌	講義
6		腹腔ドレーンの抜去に伴うリスク（有害事象とその対策等）	講義
7		腹腔ドレーンの抜去の方法と手技（1）	講義
8		腹腔ドレーンの抜去の方法と手技（2）	講義
9		腹腔ドレーンの抜去の方法と手技	演習
10	科目修了試験		試験
11	実習	腹腔ドレーンの抜去 5症例	
評価	講義	全講義受講・確認テスト100%	
	試験	筆記試験 得点率90%以上	
	実習	各症例60%以上：評価表とレポート	

<リカバリーケア・プログラム>

科目	栄養に係るカテーテル管理（中心静脈カテーテル管理）関連		
特定行為	中心静脈カテーテルの抜去		
時間数	9	講義7 演習1 試験1 実習	
概要	中心静脈カテーテルの必要性、目的を理解し、安全に管理するために必要な基礎知識を学ぶ。 医師の指示の下、手順書により、身体所見見（発熱の有無、食事摂取量等）、検査結果等が医師から指示された病状の範囲にあることを確認し、中心静脈カテーテルを管理、抜去するための知識・技術を学ぶ。		
目標	1. 栄養に係るカテーテル管理（中心静脈カテーテル管理）関連の特定行為を安全かつ確実に実践するための基礎的知識・技術を身につける 2. 医師の指示の下、手順書により、身体所見及び検査結果等が医師から指示された病状の範囲にあることを確認し、「中心静脈カテーテルの抜去」の実施の判断、実施、報告の一連の流れを適切に行えるようになる 3. 手順書の案を作成し、自身の臨床経験や環境、患者に応じて再評価・最適化できる能力を養う		
講師	大島 拓（救急科） 今枝太郎（救急科） 大平 学（食道・胃腸外科）		
	学ぶべき事項	内容	方法
1	(共通) 中心静脈カテーテル管理の基礎知識	中心静脈カテーテルに関する総論と局所解剖、中心静脈カテーテルを要する主要疾患の病態生理、フィジカルアセスメント（1）	講義
2		中心静脈カテーテルを要する主要疾患の病態生理、フィジカルアセスメント（2）	講義
3		中心静脈カテーテルの適応と禁忌、伴うリスク（有害事象とその対策等）	講義
4	中心静脈カテーテルの抜去	中心静脈カテーテルの抜去の適応と禁忌	講義
5		中心静脈カテーテルの抜去到に伴うリスク（有害事象とその対策等）	講義
6		中心静脈カテーテルの抜去の方法と手技（1）	講義
7		中心静脈カテーテルの抜去の方法と手技（2）	講義
8		中心静脈カテーテルの抜去の方法と手技	演習
9	科目修了試験		試験
10	実習	中心静脈カテーテル抜去 5症例	
評価	講義	全講義受講・確認テスト100%	
	試験	筆記試験 得点率90%以上	
	実習	各症例60%以上：評価表とレポート	

<リカバリーケア・プログラム>

科目	創部ドレーン管理関連		
特定行為	創部ドレーンの抜去		
時間数	7	講義5 演習1 試験1 実習	
概要	創部ドレーンの必要性、目的、方法を理解し、かつ安全に管理を実践するための基本的な知識を学ぶ。 医師の指示の下、手順書により、身体所見（排液の性状や量、疼痛の程度、挿入部の状態等）等が医師から指示された病状の範囲にあることを確認し、創部に留置されているドレーンを抜去するための知識・技術を学ぶ。		
目標	1. 創部ドレーン管理関連の特定行為を安全かつ確実に実践するための基礎的知識・技術を身につける 2. 医師の指示のもと、手順書により、身体所見及び検査結果等が医師から指示された病状の範囲にあることを確認し、「創部ドレーンの抜去」の実施の判断、実施、報告の一連の流れを適切に行えるようになる 3. 手順書の案を作成し、自身の臨床経験や環境、患者に応じて再評価・最適化できる能力を養う。		
講師	大島 拓（救急科） 大平 学（食道・胃腸外科） 緒方英之（形成美容外科）		
	学ぶべき事項	内容	方法
1	(共通) 創部ドレーン管理関連の基礎知識	創部ドレーンに関する局所解剖、適応と禁忌、伴うリスク（有害事象とその対策等）	講義
2		創部ドレーンを要する主要疾患の病態生理、フィジカルアセスメント、目的	講義
3	創部ドレーンの抜去	創部ドレーンの抜去の適応と禁忌	講義
4		創部ドレーンに伴うリスク（有害事象とその対策等）	講義
5		創部ドレーンの抜去の方法と手技	講義
6		創部ドレーンの抜去の方法と手技	演習
7	科目修了試験		試験
8	実習	創部ドレーン抜去 5症例	
評価	講義	全講義受講・確認テスト100%	
	試験	筆記試験 得点率90%以上	
	実習	各症例60%以上：評価表とレポート	

<リカバリーケア・プログラム>

科目名	血糖コントロールに係る薬剤投与関連		
特定行為	インスリンの投与量の調整		
時間数	17	講義13 演習3 試験1 実習	
概要	インスリン療法の必要性、目的、方法について学ぶ。医師の指示の下、手順書により、身体所見（口渇、冷汗の程度、食事摂取量等）及び検査結果（血糖値等）等が医師から指示された病状の範囲にあることを確認し、インスリン投与量の調整を行うための知識と判断過程を学ぶ。		
目標	<ol style="list-style-type: none"> 1. 糖尿病の特徴と具体的な治療方法を理解する。 2. 血糖異常や食事摂取量等その他糖尿病の状況に応じて、適切なインスリンを選択できる。 3. 医師の指示のもと、手順書により、身体所見及び検査結果等が医師から指示された病状の範囲にあることを確認し、「インスリンの投与量の調整」の実施の判断、実施、報告の一連の流れを適切に行えるようになる 4. 手順書の案を作成し、自身の臨床経験や環境、患者に応じて再評価・最適化できる能力を養う 		
講師	大島 拓（救急科） 熊谷 仁（糖尿病・内分泌・代謝内科）		
	学ぶべき事項	内容	方法
	1	糖尿病とインスリン療法に関する局所解剖、目的	講義
	2	糖尿病とインスリン療法に関する病態生理	講義
	3	(共通) 血糖コントロールに係る薬剤投与関連の基礎知識 糖尿病とインスリン療法に関するフィジカルアセスメント	講義
	4	糖尿病とインスリン療法に関する検査（インスリン療法の導入基準を含む）	講義
	5	インスリン製剤の種類と臨床薬理	講義
	6	各種インスリン製剤の適応と使用方法、副作用	講義
	7	病態に応じたインスリン製剤の調整の判断基準	講義
	8	病態に応じたインスリンの投与量の調整のリスク（有害事象とその対策等）	講義
	9	外来でのインスリン療法と入院の適応（1）	講義
	10	外来でのインスリン療法と入院の適応（2）	講義
	11	インスリンの投与量の調整 インスリン療法に関する患者への説明（1）	講義
	12	インスリン療法に関する患者への説明（2）	講義
	13	インスリン療法に関する患者への説明（3）	講義
	14	病態に応じたインスリン製剤の調整の判断基準（1）	演習
	15	病態に応じたインスリン製剤の調整の判断基準（2）	演習
	16	病態に応じたインスリン製剤の調整の判断基準（3）	演習
	17	科目修了試験	試験
	18	実習 インスリンの投与量の調整 5症例	
評価	講義	全講義受講・確認テスト100%	
	演習	レポート 80%以上	
	試験	筆記試験 得点率90%以上	
	実習	各症例60%以上：評価表とレポート	

<リカバリーケア・プログラム>

科目名	皮膚損傷に係る薬剤投与関連		
特定行為	抗癌剤その他の薬剤が血管外に漏出したときのステロイド薬の局所注射及び投与量の調整		
時間数	18	講義14 演習3 試験1 実習	
概要	皮膚損傷に係る薬剤投与に関連した基礎知識を学ぶ。薬剤の漏出の予防方法、また、身体所見（穿刺部位の皮膚の発赤や腫脹の程度、疼痛の有無等）と漏出した薬剤の量等を確認し、即時対応を行うための知識と判断過程を学ぶ。		
目標	1. 皮膚損傷に関連した局所解剖・病態生理を理解し、フィジカルアセスメントできる。 2. 抗癌剤その他の薬剤の特徴を理解し、血管外への漏出を防止するための方法を実施できる。 3. 医師の指示の下、手順書により、身体所見及び漏出した薬剤の量等が医師から指示された病状の範囲にあることを確認し、抗癌剤その他の薬剤が血管外に漏出したときの対応について判断、実施、報告の一連の流れが適切に行える。 4. 手順書の案を作成し、自身の臨床経験や環境、患者に応じて再評価・最適化できる能力を養う		
講師	大島 拓（救急科） 山本洋輔（皮膚科）		
学ぶべき事項	内容	方法	
1	(共通) 皮膚損傷に係る薬剤投与関連の基礎知識	抗癌剤の種類と臨床薬理、適応と使用方法、副作用（1）	講義
2		抗癌剤の種類と臨床薬理、適応と使用方法、副作用（2）	講義
3		抗癌剤の種類と臨床薬理、適応と使用方法、副作用（3）	講義
4		抗癌剤の種類と臨床薬理、適応と使用方法、副作用（4）	講義
5		抗癌剤の種類と臨床薬理、適応と使用方法、副作用（5）	講義
6		抗癌剤の種類と臨床薬理、適応と使用方法、副作用（6）	講義
7		抗癌剤の種類と臨床薬理、適応と使用方法、副作用（7）	講義
8		ステロイド剤の種類と臨床薬理（1）	講義
9		ステロイド剤の種類と臨床薬理（2）	講義
10		ステロイド薬の副作用（1）	講義
11		ステロイド薬の副作用（2）	講義
12	抗癌剤その他の薬剤が血管外に漏出したときのステロイド薬の局所注射及び投与量の調整	抗癌剤その他の薬剤が血管外に漏出したときの病態生理（1）	講義
13		抗癌剤その他の薬剤が血管外に漏出したときの病態生理（2）	講義
14		抗癌剤その他の薬剤が血管外に漏出したときの症候と診断（1）	演習
15		抗癌剤その他の薬剤が血管外に漏出したときの症候と診断（2）	演習
16		薬剤の血管外漏出時のステロイド薬の投与及び及び投与量の調整（1）	講義
17		薬剤の血管外漏出時のステロイド薬の投与及び及び投与量の調整（2）	演習
18	科目修了試験		試験
19	実習	抗癌剤治療を受けている対象 5症例	
評価	講義	全講義受講・確認テスト100%	
	演習	レポート 80%以上	
	試験	筆記試験 得点率90%以上	
	実習	各症例60%以上：評価表とレポート	